

*The Catcher in the Rye*と 「赤頭巾ちゃん気をつけて」の比較考察

斎藤 昭二

If I wasn't hard, I wouldn't be alive.
If I couldn't ever be gentle,
I wouldn't deserve to be alive.¹⁾

— Raymond Chandler —

I

庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」(1969)は発表当初より現代のアメリカ作家 J.D. サリンジャー (Jerome David Salinger, b.1919) の *The Catcher in the Rye* (1951) との類似性が指摘されてきた²⁾。「盗作」「贋作」を臭わせるような論評に対して著者自身はこれをはっきりと否定し、「サリンジャーを盗んでいるなんて批評は、十年も、いや二、三年もすれば、そうでなかった—とわかりますよ」³⁾と発言しているし、確かに読後感は正反対である。

これはむしろ T. ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945) の *An American Tragedy* (1925) と石川達三の「青春の蹉跌」(1968) との関係を想起させる。ドライサーは *An American Tragedy* において、貧しい辻説法師の息子 Clyde Griffiths が、性格はおとなしく温厚にもかかわらず⁴⁾、上流社会へと這い上がるアメリカン・ドリームを追い求める過程で一瞬とは言え自らの人間性を失い破滅してゆく様を描き、これは「アメリカの悲劇だ」と糾弾したのに対し、石川達三は「青春の蹉跌」において、構図と筋はほぼそのまま日本に移したものの、主人公である江藤賢一郎の性格を若さにありがちな高慢で自負心に満ちたものに変え、それに躓いて破滅する過程を描くことで、より普遍的な青春像を捉えようとしたのである。

つまり T.S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) があの有名な「ハムレット論」⁵⁾で展開したように、作品からそれが典拠とした粉本を引き去ることにより、作者がある必要性からやむを得ずに改変したと思

われる点に注目することにより、作者の独自性を探ることは可能なのである。庄司薫は何を変えたのか、あるいは何を付け加えたのか。本論では両作品を文体・時代設定・主人公及びその性格・背景・筋立て等を比較考察することにより、違いを浮き彫りにし、その点に着目することで「赤頭巾ちゃん気をつけて」の独自性を探ってみたい。

II

*The Catcher in the Rye*の魅力は何よりもその言葉遣いの面白さと痛快さである。退学を言い渡された主人公ホールデン (Holden Caulfield) はクリスマス休暇を数日前にして実家のあるニューヨークに夜汽車で帰る。その車中でクラスメートの母親に会い、声を掛けられる：

'Oh, do you go to Pencey?' she said. She had a nice voice.
A nice telephone voice, mostly. She should've carried a
goddam telephone around with her.⁶⁾

偶々彼女の息子がホールデンと同じクラスであることが分かり、その人物が話題となるが、ホールデンはその人物像を読者にこのような言葉で語る：

Her son was doubtless the biggest bastard that ever went
to Pencey, in the whole crummy history of the school.⁷⁾
(彼女の息子というのは、ペンシーの生徒の中でも、あそこのいやらしい校史はじまって以来、最大の下司野郎なんだ。)⁸⁾

息子の学校での姿を知らない母親が親ばかにも「あの子はとても敏感な (sensitive) 子供でしてね。これまで、他のお子さんたちとうまくおつき合いができたことってないんです。年の割にものごとを少し深刻にとりすぎるんだと思いますわ」⁹⁾ と言うと、ホールデンはすぐさま心の中でこう反応する：

Sensitive. That killed me. That guy Morrow was about as

sensitive as a goddam toilet seat.¹⁰⁾

(敏感か！これには参ったね。モロウが敏感なら、トイレの腰掛け板だって敏感だろう。)¹¹⁾

'goddam,' 'bastard'といった swearword, slang, 破格構文の使用や as sensitive as a toilet seat 「トイレの便座と同じくらいに繊細」といった面白い比喩の使用など作者サリンジャーは主人公ホールデンを通してアメリカの高校生 (teen-agers) の使う話し言葉の魅力を十二分に發揮している。

一方、庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」では、物語の冒頭はこう始まる：

ぼくは時々、世界中の電話という電話は、みんな母親という女性たちのお膝の上かなんかにのっているのじゃないかと思うことがある。特に女友達にかける時なんかがそうで、どういうわけか、必ず「ママ」が出てくるのだ。もちろんぼくには（どなるわけじゃないが）やましいところはないし、出てくる母親たちに悪気があるわけでもない。それどころか彼女たちは、（キャラメルはくれないまでも）まるで巨大なシャンパンのびんみたいに好意に溢れていて、まごまごしているとぼくを頭から泡だらけにしてしまうほどだ。¹²⁾

「ぼくは…」で始めたり、「お膝の上かなんかに」といった表現や（ ）内で補足説明するところなど、十代の若者の口語表現の自由闊達さを自在に駆使していることが分かる。つまり、サリンジャーの *The Catcher in the Rye* も庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」もともに十代の若者の口語表現の魅力を十分に發揮していると言える。

時代は、*The Catcher in the Rye* では、アメリカが好景気に沸く1950年頃のクリスマス休暇に入る前の数日のこと、「赤頭巾ちゃん気をつけて」では、日本が経済の高度成長期にある1969年の春先の数日のこと、というように共に数日のことを詳細に描いている。

場所は、*The Catcher in the Rye* では、ニューヨーク、「赤頭巾ちゃん気をつけて」では、東京というように共に大都会である

主人公は、*The Catcher in the Rye* では、ホールデン・コールフィールド (Holden Caulfield) というアメリカの16才の高校生であり、物語の冒

頭で4度目の退学を言い渡されている。「赤頭巾ちゃん気をつけて」では作者と同名の庄司薫という日比谷高校の3年生である。しかし、彼も進学先と考えていた東京大学が学生運動の激化に伴い入学試験を中止としたことで、行き先がなくなっている。つまり、ホールデンにはクリスマス休暇が終わっても戻る高校がなく、薫くんには4月から進学する大学がないというように共に社会的な意味で「宙ぶらりん」の状態なのである。

性格は、*The Catcher in the Rye* のホールデンは高校生にしては背が高く、白髪交じりで、煙草を吸うなど悪ぶってはいるが、退学を前に一緒に映画を見に行くことになった寮のルームメイトが支度をしている間に、窓の棧に降り積もった雪を丸めて外に投げる時点で：

The snow was very good for packing. I didn't throw it anything, though. I started to throw it. At a car that was parked across the street. But I changed my mind. The car looked so nice and white. Then I started to throw it at a hydrant, but that looked too nice and white, too. Finally, I didn't throw it at anything.¹³⁾

(握るのにはもってこいの雪だったな。しかし、僕は、そいつを何にもぶっつけなかった。ぶっつけかけはしたんだよ。道路の向こう側に停まっていた車にね。ところが気がかわったんだ。その車があんまり白くてきれいでね。次には消火栓にぶっつけようとした。ところが、これがまた、実に白くてきれいなんだな。それでとうとう、何にもぶっつけなかったのさ。)¹⁴⁾

最初は停車中の車に、次には消火栓にぶっつけようとしたが、それらに雪がきれいに白く降り積もっているの、直前になって自己制止している。言葉遣い等は悪ぶっているけれど、性格は「優しい」のである。

また、もう一つ着目する点がある。ペンシー高校での寮生活を語る場面でホールデンはこう始める：

We always had the same meal on Saturday nights at Pencey. It was supposed to be a big deal, because they give you steak. I'll bet a thousand bucks the reason they did that was because a lot of guys' parents came up to school on Sunday, and old Thurmer

probably figured everybody's mother would ask their darling boy what he had for dinner last night, and he'd say, 'Steak'.¹⁵⁾

(ペンシーでは、土曜の夜の献立は、いつも同じものにきまっていたが、しかも、これが、ステーキが出るというんで、すごいご馳走ということになってたんだ。学校がどうしてこういうことをしたかというどだな、千ドルかけてもいいけど、日曜日には大勢の生徒の親たちが学校へやって来るからなんだ。みんなのおふくろが、愛するせがれに向かって、ゆうべはお食事に何をいただいたの、ってきくだろう。するとせがれが「ステーキ」って答える — サーマーの野郎はそこを狙ったにちがいない。¹⁶⁾

日曜に訪ねてくる母親の反応を計算して土曜の晩の献立を決めるという校長サーマーの偽善ぶりを暴き、これに激しく反発する：

What a racket. You should've seen the steaks. They were these little hard, dry jobs that you could hardly ever cut.¹⁷⁾

(下司な根性じゃないか。そのステーキなるものを見せてやりたいよ。ちっちゃくて堅くて汁気がなくて、ろくに切れもしないんだぜ。)¹⁸⁾

この種の偽善は phoneies と呼ばれ、作中に数多く登場し、その度にホールデンが激しく反発を示す。つまり、ホールデンの性格は「優しく」「偽善 (phoney) に鋭く反発する」というものである。

一方、「赤頭巾ちゃん気をつけて」の薫くんの性格はどうであろうか。物語の冒頭で、足の親指の爪をはがしたので、テニスをする約束を断るために女友達 (由美) に電話をすると母親が出る：

「あら薫さん、元気？」と、彼女はやや感動的な柔らかい声で言い、ほくは人類以前の爪なしの身でありながら、ややあきらめきって「はい。」と答えた (ほくはどうもすぐこういう「いいお返事」をする癖があって、この調子では瀕死の床にいても、お元気？ときかれたら、はい、なんて言うのじゃないかと思う。)

「どうしてらしたの？大変だったわね。」

「はい、まあ……。」

「残念ね。それでどうしたの？京都へ行くの？」

「いいえ。」

「そう……。遠いでものね。」

「ええ。」

「それに京都もいま大変なんでしょう？ゲバルトで？」

「はい。」

「いっそのこと、京都もどこもみんな壊しちゃえば公平なのね。」

「ハハハハ」(これはぼくの、いかにも爽やかで屈託のない笑い声のつもりなんだ……。¹⁹⁾

中年女性の世間話にもお行儀よくつき合っているところにいかにも薫くんの「優しい」性格が伺われる。また、彼にも他面がある。爪の治療に行った、かかりつけの医院での美人の女医さんの「誘惑」に辛うじて持ち堪えた後で自己嫌悪が彼を襲う：

ぼくを襲ったいなごの大群みたいな悪口というのは、要するにぼくがまたお行儀のいい優等生ぶりを発揮したということに集中していた。…つまりお行儀のいい優等生で、将来を計算した安全第一主義者で、冒険のできない卑怯な若者で、きざな禁欲家で、自分の欲望に不正直な偽善者で、いい子になりたがる俗物で、時代遅れのスタイリストで、非行動的インテリの卵で、保守反動の道徳家でetc etc etc …… (あーあ、ぼくはほんとうに自分への悪口にかけちゃ誰にも負けないってわけなんだよ。²⁰⁾

薫くんも「偽善」的なものには過敏に反応している。しかし、彼にはもう一つの面もある。「関西の田舎から大越境入学してきたやつで、秀才なのだけれどなんとなく劣等感が強い」²¹⁾ 中島という級友の居直った姿を親友の小林がこう伝える：

「…あの中島のやつ、きょうも朝っぱらから来やがって、さんざっぱら今週のヒットパレードをきかせていきやがったんだ、解説つきで。あの田舎っぺめ。」…「大体あいつは、おまえも知ってると思うけれど、最初田舎から出てきた時はガチガチのベートーベンだ

ったんだぞ。ところがしばらくしたらとたんにモデルチェンジだ。つまり、おれがおまえなんかとコンチェルトをやったりするのを見て頭へ来たんだ。そしてダンモだビートルズだフォークソングだ歌謡曲だと次々に騒いで、いまじゃ今週のヒットパレードだ。つまり歌は世につれ世は歌につれ、これこそ音楽だってんだ。全く面倒みきれないよ。つまり、おれたちのキザなコンチェルトを蹴っとばして足をひっぱれりゃ、なんでもいいってわけだ、大衆の支持のもとにな。そして二言目にはあなた方上品な都会人はとか、私はどん百姓の次男坊だからとか言ってさ。…」²²⁾

偽悪的なものへの反発を示す友人の言葉ではあるが、薫くんも後に同感である旨を表明することから、薫君の場合には偽悪的なものへの反発もあることが分かる。

筋についても両作品はほぼ同様に展開する。*The Catcher in the Rye*の場合、悪ぶってはいるが、心は純粹で優しい青年であるホールデンが都会に住む大人のさまざまな偽善的でいやらしい面に触れて傷つくが、小さな妹のあどけない純粹な心に救われ、「何になりたいのか」という妹の問いに

I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody's around - nobody big, I mean - except me. And I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over - I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out from somewhere and catch them. That's all I'd do all day. I'd just to be the catcher in the rye and all. I know it's crazy, but that's the only thing I'd really like to be. I know it's crazy!²³⁾

と熱い決心を語る。

一方、薫くんも周囲の偽善（悪）的な人間のいやらしさにうんざりし、内向する心をもてあまして銀座に出るが、そこで自分のことよりも相手の

ことを一心に思いやる小さな女の子の優しさに救われ、女友達の由美を呼び出し、二人で春先の夜道を歩きながら、心のうちで

ぼくは海のような男になろう、あの大きな大きなそしてやさしい海のような男に。そのなかでは、この由美のやつがもうなにも気をつかったり心配したり嵐を怖れたりなんかしないで、無邪気なお魚みたいに楽しく泳いだりはしゃいだり暴れたりできるような、そんな大きくて深くてやさしい海のような男になろう。ぼくは森のような男になろう、たくましくて静かな大きな木のいっぱいほえた海みたいな男に。そのなかでは美しい金色の木もれ陽がしずかにきらめいて、みんながやさしい気持ちになってお花を摘んだり動物とふざけたりお弁当をひろげたり笑ったり歌ったりできるような、そんなのびやかで力強い素直な森のような男になろう。そして、ちょうど戦い疲れた戦士たちがふと海の匂い森の香りを懐かしんだりするように、この大きな世界の戦場で戦いに疲れ傷つきふと何もかも空しくなった人たちが、何故とはなしにぼくのことをふっと思いうかべたりして、そしてなんとはなしに微笑んだりおしゃべりしたり散歩したりしたくなるような、そんな、そんな男になろう……²⁴⁾

と熱い決心を語るのである。

以上、両作品は文体・時代設定・主人公及びその性格・背景・筋立て等はよく似ている。

III

ところが読後感は正反対と言ってよいほど大きな隔たりを示す。*The Catcher in the Rye* の場合、ライ麦畑で無邪気に走り回る子供たちに象徴される心の純粹さ (innocence) を守る人になりたいという熱い決心があるにもかかわらず、それをも含めた物語全体が、実は精神病院ないしは病院の精神科に入院中の病室から語られていることが最終の第26章で衝撃的に明かされるのである。

A lot of people, especially this one psychoanalyst guy they have here, keeps asking me if I'm going to apply myself when I go back to school next September.²⁵⁾

(多くの人たちが、ことに、この病院にいる精神分析の先生なんか
そうだけど、今度の9月から学校に戻ることにになったら、一生懸命
勉強するかって、始終僕にきくんだな。)²⁶⁾

彼のようにあまりに純粋な心の持ち主は今のアメリカでは精神病院くらいにしかいられないという痛烈な物質文明批判なのであろうか。いずれにせよ、読む側はずっしりと重い問題を手渡された感で読み終わる。

一方、「赤頭巾ちゃん気をつけて」の場合は、無邪気で相手のことを一生懸命思いやる小さな女の子の優しさに触れ、絶望からの活路を見出した薫くんは、その喜びから女友達と夜道を手をつないで歩きながら溢れるような思いで熱い決心を心の中で語る。爽やかなハッピーエンディングである。また、作者はユーモラスな「翌日読んでもらいたいささやかなあとがき」を付け加える余裕すらある。

両者の違いはどこからくるのであろうか。どちらの主人公も、つまりホールデンも薫くんも共に性格は優しく、純粋さを求めるがゆえに周りの偽善に反発し、傷つき絶望するが、無邪気な少女の無私の魂に癒され、熱い決心を語るころまで同じなのに、どうしてその先がかくも正反対に違ってしまうのだろうか。

この点で注目すべきなのは、後発の作品である「赤頭巾ちゃん気をつけて」の作者が原型ともいえるべき*The Catcher in the Rye*に必要やむを得ざる事情から改変ないしは付け加えた点の有無であるが、ここで興味深いのは次の一節である。日比谷高校の3年生である薫くんが進学先として選んだのは東大の法学部であるが、そのきっかけはそこに通う薫くんのお兄さんと彼の指導教授である東大法学部の先生とが話す楽しそうな会話を傍らで聞いていたときに受けた印象である。その中にこんな一節がある。

この時ぼくはほんとうにいろいろなことを感じそして考えてしまった。どう言ったらいいのだろう、たとえばぼくは、それまでにもいろいろな本を読んだり考えたり、ぼくの好きな下の兄貴なんかを見ながら、(これだけは笑わないで聞いて欲しいのだが)たとえば知

性というものは、すごく自由でしなやかで、どこまでもどこまでものびやかに豊かに広がっていくもので、そしてとんだりはねたりふざけたり突進したり立ちどまったり、でも結局はなにか大きな大きなやさしさみたいなもの、そしてそのやさしさを支える限りない強さみたいなものを目指していくものじゃないか、といったことを漠然と感じたり考えたりしていた… (下線筆者)²⁷⁾

また、薫くんにはちょっと過激な次のような発言もある。

ほくだってももちろんこの現代社会が明らかにウサンくさくそして大きく間違っていることを知っている。だからほくだっただけがどうしても必要だと分ればいつだっただけが棒をとるだろう。それが自分だけのためではなくみんなを幸福にするためにどうしても必要であり他に方法はないということが、誰でもなくこのほく自身の考えで何よりもこの胸で分った時には。でもその時にはほくは… 確実に政府でも国家権力でもひっくり返すだろう。やれるだけやればいいなどと言っていないで、ちょうど由美を襲う暴漢の息の根を確実にとめるように、必ず絶対に、あらゆる権謀術数、あらゆる寝わざ裏わざを動員して、時には素早く時にははずる賢くそして時には残忍極まる方法を使ってでも、確実にほくのそしてみんなの敵を、それが政府だろうと国家権力だろうと絶対確実に倒し息の根をとめるだろう……。²⁸⁾

ホールデンは優しいだけだった。しかし、薫くんは優しいだけではなかった。彼は、この世界において優しさを貫くには「そのやさしさを支える限りない強さ」もまた同時に必要であることに気がついていた。共に優しさを求めながら、強さを欠いたホールデンは精神病院に入れられ、強さの必要性に気がついていた薫くんは夜道を女友達と手をつなぎながら歩き、熱い決心を語ることができたのであった。

IV

わが国の和歌や連歌には本歌取りという技法が伝統的にある。シェークスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の作品のほとんどには *Anglo-Saxon Chronicle* 等の粉本がある。石川達三の「青春の蹉跌」には換骨奪胎する基となるドライサー作 *An American Tragedy* がある。しかし、誰も本歌取りした新しい作を元歌の贋作とは言わない。シェークスピアの *Hamlet* (1600-01) をトマス・キッド (Thomas Kyd, 1558-94) 作とされる *der Ur-Hamlet* の盗作とは言わない。また「青春の蹉跌」を *An American Tragedy* の翻案とは言わない。それぞれ元の作品を出発点としながらも、そこに新たな要素をつけ加えることによって、自己の表現したい世界を創造しているのである。シェークスピアは主人公ハムレットを「表現し得ない感情に支配されている」²⁹⁾ とすることで、文学史上に残る永遠の青年像を作り上げることに成功した。石川達三は主人公の性格を若さ特有の高慢で自負心に満ちたものに作り変え、それに躓いて破滅する過程を詳細に描くことで、より普遍的な青春の構図を定着し得た。

同様な意味において、庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」は Salinger 作 *Catcher in the Rye* の盗作でも贋作でもない。「赤頭巾ちゃん気をつけて」は時代を批判するにとどまらず、現代という困難な時代を生き抜く方法を模索する試みの出発となる作品であり、その歩みは「黒」「白」「青」と続いてゆく。

Notes

- 1) 「強くなければ、生きてはいけない。優しくなければ、生きている価値がない。」作中の私立探偵フィリップ・マーローの言葉。
- 2) 「"薫ちゃん"気をつけて」(『東京新聞』1969年9月2日)
- 3) 同上
- 4) Clydeは伯父の経営する縫製工場に勤めた折り、好きになった女工のRobertaに声一つかけられない内気なおとなしい青年と描かれている。
- 5) T.S.Eliot, "Hamlet and His Problems" (1919)

- 6) J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye* (Penguin Books, repr. 1972), p. 59
- 7) *Ibid.*, p. 59
- 8) J.D.サリンジャー著「ライ麦畑でつかまえて」(野崎孝訳, 白水社, 1984), p. 87.

以下訳文は野崎孝訳による。

- 9) 野崎訳, p. 88
- 10) J.D.Salinger, *op.cit.*, p. 59
- 11) 野崎訳, p. 88
- 12) 庄司薫, 「赤頭巾ちゃん気をつけて」(中央公論社, 昭和48年), p. 1
- 13) J.D.Salinger, *op.cit.*, p. 40
- 14) 野崎訳, p. 59
- 15) J.D.Salinger, *op.cit.*, p. 39
- 16) 野崎訳, pp. 57-58.
- 17) J.D.Salinger, *op.cit.*, p. 39
- 18) 野崎訳, p. 58.
- 19) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, pp. 7-8
- 20) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, pp. 49-50
- 21) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, p. 104
- 22) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, pp. 103-104
- 23) J.D.Salinger, *op.cit.*, pp. 179-180
- 24) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, pp. 149-150
- 25) J.D.Salinger, *op.cit.*, p. 220
- 26)
- 27) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, p. 29
- 28) 上掲「赤頭巾ちゃん気をつけて」, pp. 128-129
- 29) "Hamlet (the man) is dominated by an emotion which is inexpressible, ..." (T.S.Eliot, "Hamlet and His Problems", p. 48)